対 談 ②

ハンセン病回復者の地域復帰について

地域復帰者
川島（かわしま）　保（たもつ）

解放出版社
原田（はらだ）　恵子（けいこ）

大阪、都島区に社会復帰された川島さんと、ハンセン病問題にとりくんでいる原田さんと対談いただきました。（2回にわけて掲載しています。）

原田 恵子

川島　保

〈川島 保さんプロフィール〉
1933年生まれ。
小学校5年でハンセン病発病。
1944年　岡山の長島愛生園入所。
1970年　大阪に社会復帰するが、公衆浴場の不備で床にもれていた熱湯で足の裏一面を大やけど。
回復者であることを明らかにしていなかったため、病院にもいけず、誰にも相談できないまま帰園。
1999年「らい予防法違憲国家賠償訴訟」の原告に。
2002年　都島区に、社会復帰を果たす。

◇　黒川温泉事件について

（原田）　次に、黒川温泉宿泊拒否事件の事について聞きたいんですが。

（川島）　ハンセン病に関して国は私たちにしてはいけないことを長くやりすぎた。結局、謝罪ができずにずっと持ち越したかな。世界的な開放政策を日本はようしなかった。あまりにも、人権を無視し、隔離していたこと、あまりにもひどすぎた事を国民の前で謝ることができなかった。

1953（昭和28）年に予防法が改定され、少しは変化があったが、1949（昭和24）年の所長会議で厚生省医務局長の東龍太郎が「予防法」を変えると所長に言ったら、光田健輔が“わしの目の黒いうちはそんなことは許さん”と言った。結局あんまり、変わらない「予防法」ができ、そして「無らい県運動」と続いていった。

1957（昭和32）年には、“手、足、顔に後遺症がでてなく、菌もなかったら出ていってもいい”という退所基準ができた。ただ、療養所では患者が患者の世話をするという制度があり、元気になったものが出ていったらたちまち困るという状況があり、退所基準ができたのにもかかわらず、ずっと隔離されていた。

（原田）　黒川温泉の時も社会も国も啓発活動ができていなかった。社会も反省しなければならないと思う。

（川島）　社会も反省しなければならないということよりも、園側と医師がはっきりとしない態度をとったことが大きい。自分自身も“はっきりと治ったんだ”と自信を持って社会によう出ていかなかった。

「邑久光明園」の監房。なぜ監房が必要だったのか。

（原田）　園内のみんなもあまり驚いていなかったみたい。

（川島）　自分自身、後遺症があって、社会の人に嫌われているといった気持ちってあるんだよな。

療養所では医師が友達に注射をしたとき、座敷に新聞紙をひいて長靴を履いたまま入ってきて、そして注射した。まるでおまえたちは人間でないという扱いだった。

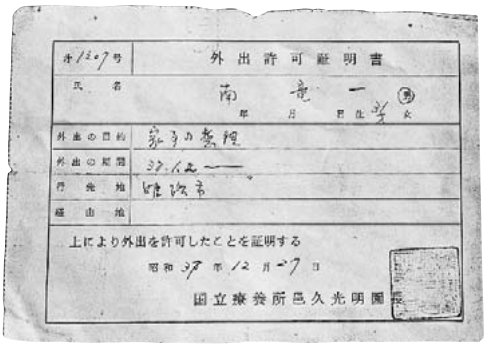
私も、療養所の人以外は心を開かなかった。社会復帰した際に、仕事の相棒がいて1日交代の配車係であったが、その人が辞めるといったので、本当のことを話した。その人だけが知っていた。

（原田）　その人の反応はどうでしたか。

（川島）　“そんなに気にすることはないよ”と言ってくれた。ただ、その人が辞めるから言えただけで、もしまだ続けていくなら言わなかっただろうな。

国は、菌がなくなったことで治ったと啓発しなければならなかった。病気のことは嘘をついて、ハンセンと言わなかった。園長も“多発性神経炎”と言えと。

本当にやすらいだのは、部屋に帰ってきた時


外出許可証明書

氏名　南　竜一

外出の目的　家事の整理

外出の期間　37.12.27～

行先地　姫路市

帰山地

上により外出を許可したことを証明する

昭和37年12月27日

国立療養所邑久光明園長

入所者が外出する場合に必要だった、「許可証明書」。

かな。あのときはひとつ、ひとつ嘘つかなければならなかった。

（原田）　わたしは、今までの行政の不十分さがあると思う。黒川温泉の件を踏まえて、啓発活動をもっと積極的にしていかなければならない。市町村の人権部局などは特に理解をしてほしい。

◇　園内の生活

（原田）　川島さんが愛生園にはいったのは、やっぱり、無らい県運動だったの？

（川島）　入る時は県の衛生課の人がちょくちょくきおった。

（原田）　やっぱり。

（川島）　白い服を着て来た。奥の部屋で酒を飲んでいた。おやじは酒が弱いんですぐに声が大きくなった。別に威張っている様子もなく、わたしを診察する様子もなかったが。

（川島）　私の場合は、すぐ上の姉が1940（昭和15）年大阪に働きに出てすぐ発病したらしい。

（原田）　何でやろうな。

（川島）　お父さんとお母さんはどうもなかった。貧しかったのが原因だったのかな。私が、発病したのを知ったのは、左腕の肘がマヒしていたから。

　子どもの頃、友だちとさわいでいて、傷ができて、そこから血が出ているのに痛くない。父親に言ったら、姉と一緒の病気になったのかな、とぼそぼそと言った。その言葉が妙に頭に残っていたんやな。5年生のはじめぐらいに発病し、6年生で岡山県に入園した。

（原田）　お姉さんと川島さんは病気になったことによって、家族と地域との関係は悪くなかったんやな。

（川島）　遺伝と思ったみたいで、わしらの所は嫌われた記憶はない。

（原田）　家族との関係が絶たれなかったのは珍しい。

（川島）　わしらのところでは家族がハンセン病になって、家族が嫌われた試しはなかったんやろうな。私の家の隣は、男の子ばかりいたので、服もいろいろまわしてもらったりもした。

（原田）　11歳で入園して、園ではどのような状態でしたか？

（川島）　園では、「望が丘」の4アールの土地で農作物をつくる。小さい頃は自分達の部屋で煮炊きをするための薪をとりに行ったりした。子どもたちどおしで山に入った時、海をながめたり、ホッとできた。たまにお腹が減って、大人たちのつくった大根や人参を失敬したこともあった。夏にはできたかぶをとりに行ったりもした。

（原田）　園で小学生は何人いたのですか。

（川島）　小学校6年生は、男5人、女2人で計7人。全部で50人ぐらいいたはずや。6畳に4人寝たから。130人から150人くらいいた勘定や。

　入園した時「書き取り」をしなさいと言われたが、頭がぼっとしてできなくて、1日中座らされた記憶がある。まるでいじめにあった気がした。なにくそ大きくなったらやり返してやると思った。

　療養所で一番つらかったのは、18歳の時病気が急に悪くなり、顔が腫れていて目が見えなくなったことがあった。そのとき来てくれたおやじの顔が見えないくらい顔が腫れていた。目を見開けなければ顔を見ることができない。

　そのとき、おやじが“死んでもいいじゃないか”と言った。私はあまりひどいことを言うなとは思わなかった。自分もその時は死にたいと思っていた時でもあり、そういう風に思うのは仕方がない、死んでもいいのになあ、と思った。

◇　これからのこと

（原田）　ぜひ大阪の出身者だけじゃなく、あちらこちらの療養所から大阪に来れるようにしたい。そのためには、大阪府とも検討を進め、ちゃんと受け入れしなければならない。

（川島）　大阪で生活をしようとする人はなかなかいないし、平均年齢も76歳。この1年以内にはいなかった。

　それから、府営住宅は不便だが、ここは便がいいから、後5年は生きられると思うので私はここに住む。私自身は社会復帰してよかったと思うが、正直、社会復帰はしてほしいと思うけれど、本人の気持ちを大事にして、勧められないと思う部分もある。やはり時間がたつことによって、だんだんと難しいと思う。

（原田）　園内でも、社会復帰についていろいろと話を聞いてくれるような人がおればいいのになあ。それと、大阪市や府が療養所に向けて大阪に来たら住まいのこととか、医療がこんなんですとか、安心できる説明が必要だと思う。

※川島さんは、3月初旬に体調を崩され、2週間ほど入院されていました。今は元気に暮らしていますが、一人暮らしの不安も感じられておられました。